

「瞞天过海(天を欺き海を渡る)」は、日本では余り馴染みがありませんけれど、中国では幼稚園児に、このような言葉も教えると言うことに、面白みを感じました。



唐の太宗(即位する前の李世民)は、かつて30万の大軍を率いて、高句麗を攻めたことがありました。(高句麗征伐は海上から計画されました。)

しかし、海を見たことがなかった李世民は、水を怖がって、海上からの遠征にしり込みしました。そこで、配下の将軍薛仁貴は、太宗の為に一計を案じました。

その日、薛將軍は部下を李世民の所へ遣わし、「或る豊かな商人が30万の軍隊の為に宴会を開いてくれ、李世民にも宴会に出席するよう希望している」と伝えさせました。李世民は宴会に出席することに同意して、その兵士と連れ立って、その商人の家に向かいました。壁も床も豪華な絨毯で覆われた廊下を通して、部屋に入ると、沢山の酒とご馳走が並んでいて、賑やかな宴会が始まりました。李世民は、楽しく酒を酌み交わし、ご馳走に舌鼓を打っている間に、ふとヒューヒューと鳴る風の音に気が付き、訝しく思って窓の外を覗いてみると、驚いたことに、辺りは波が逆巻く大海原でした。彼は、既に彼の30万の軍隊と一緒に海に乗り出し、高句麗へと向かっているのです。



言葉の説明では：「瞞」とは、真実を隠して人に知らせないこと。だましのテクニックを使って、密かに活動すること、と出ています。

使用例としては、「間違いを犯したとき、それを認めるのが嫌で、だましのテクニックを用いて、自分の過ちを覆い隠そうとする人がいる。」となっています。

この言葉、日本で日常的には使いませんが、辞書には、「天を欺いて、海を渡る」「人目をくらまして悪事を行う」と出ています。言葉として知っていれば、何かと便利に

使えるかも知れませんが、入学準備をしている子供たちに、態々教える言葉でもないように思います。お話としては面白いのですが、騙したことは悪いことだとの認識を与えずに話しているところが、中国らしいというか、日本人としては少々違和感を覚える処です。

日本の子供向けのお話だと、騙すことは悪いことで、他人をだますと、一時成功したようでも最後には必ず、騙したことへの報いがあると、因果応報の考え方が教えられています。例えば、猿蟹合戦のサルのように。

もう一つ、面白い点は、騙される主人公が、即位前とは言え、唐王朝の二代目皇帝太宗である点です。中国の皇

帝は絶大な権力を持ち、名前と同じ字は使えないとか、科学の答案では、皇帝の名前は、他の行頭より一字高く書くとか、日本人にしたら気が遠くなりそうな方法で敬われているのに、時代が代わったとは言え、皇帝が、1500年後に国民から笑いものにされているのが不思議です。

でも、これは中国独特の易姓革命の観点から見ると何でもないことです。中国の王朝は、天命を受けて政治を司るので、天命に背けば、異姓の一族が新たに王朝を建て、前王朝を倒すのは当然で、倒された一族は野に下ります。これが易姓革命です。

この件で、私は北京滞在中に面白い経験をしました。20年近く前、江沢民政権が内政の必要性からか、国民の反日感情を煽るために、毎日午後の定時に、抗日戦争の映像を流すので、中国人の友人に、「中国にアヘンを持ち込んだイギリスや、アロー戦争で北京に攻め込んで、円明園を破壊し尽くした英仏軍の方が、中国にとっては、日本よりずっと大きな損害を与えたのに、何故非難しないの?」と抗議したところ、友人は、「英仏が損害を与えたのは清王朝だが、日本は中華人民共和国と戦ったのだから」との返事が帰って来て、びっくりしました。現在の中国人にとって、滅亡した清朝は、もはや自分の国ではなかったのです。

